中学校社会科における論理的に記述する力の育成
－　タブレット端末の活用を通して　－

学籍番号　　189976
氏　　名　　辻　大輔
主指導教員　柏木　賀津子

１．実践研究の背景

2018年に行われたOECD（経済開発協力機構）の学力調査であるPISA調査の結果、日本の読解力における平均得点及び順位が低下していることが明らかとなった。また2015年以降、PISA調査の問題がコンピュータ使用型に全面移行している中、学習活動におけるデジタル機器の利用が他のOECD加盟国と比較して低調であることも明らかとなった。このことから学校における読解力の育成と1人1台のコンピュータ（タブレット）の効果的な活用が求められている。読解力は国語で育成すべき学力と捉えられがちであるが、全教育活動において「言語活動」の重視がなされていることから、社会科においても育成すべき学力であるといえる。松野（2004）は読解力の構成要素の1つである「読解表現力」を「ある課題（問題）に対して、テキストから得た情報をもとに、自分の考えを論理的に記述する力」であるとしている。このことから、社会科における読解力の育成にあたっては、多様なテキストの読み取りを通して、論理的に記述する活動を取り入れることが必要である。以上より、本実践研究では、タブレット端末を活用する中で、論理的に記述する力の育成の視点を取り入れた授業実践を行い、その効果を検証することを目的とした。検証方法は、単元事前・事後テスト・アンケート変容、M-GTAによる授業ワークシート記述分析を用いた。

２．実践研究

2.1 実践研究Ⅰ

実践研究Ⅰでは、基本学校実習Ⅱにおける中学校3年生公民分野において、論理的に記述する力の育成をめざし、批判的思考態度に見られる4つの観点（論理的思考の自覚・探求心・客観性・証拠の重視）を取り入れた実践効果の検証・考察を目的に授業実践を行った。授業を行う上で、生徒同士の意見を共有できる場として討論を取り入れ、論理的に説明する際の補助として、ワークシートにトゥールミン図式を用いた。授業前後の質問紙調査の項目ごとの得点を比較した結果、「客観性」と「探究心」の2観点を示す項目で有意な向上が示された。しかし、「論理的思考の自覚」と「証拠の重視」の2観点については有意な差は見られなかった。以上の結果より、論理的に考える活動と論理的な意見を形成する際の考える材料の不足が課題としてあげられた。

2.2 実践研究Ⅱ

実践研究Ⅱでは、発展課題実習ⅠⅡにおいて、複数の資料（非連続型テキスト）から情報を読み取り、論理立てて説明することを取り入れた授業実践の検証・考察を目的に授業実践を行った。本

研究では論理的思考力を「社会的事象を関連付けながら，根拠を明確に筋道立てて考える力」と定義し、「論理的整合性」と「情報読み取り」の2観点として評価を行った。これらの2観点が記述の中で見られた場合に、論理的な記述力が育成されたとして実践を行った。

2.2.1 発展課題実習Ⅰ

発展課題実習Ⅰでは「ヨーロッパ州」において複数の資料（非連続型テキスト）から情報を読み取り、論理立てて説明することで、生徒の社会的事象に対して論理的に記述する力を育成する授業実践の効果の検証・考察を行った。授業前後の単元テストの平均得点を比較したところ、授業後の平均得点が低下しており、有意な差は見られなかった。またワークシートの分析から「情報読み取り」に関しては第1時と第4時を比べると有意な差が見られたが（ z (52) =3.47, $^{**}p$ = .01 ）、「論理的整合性」に関しては有意な差が見られなかったことから、生徒はまず「情報読み取り」が向上し、その上で「論理的整合性」への思考が段階的に高まることが分かった。しかし、情報読み取りと論理的に考える活動の混同と、導入から中心発問までの授業展開の2つの点に課題が残った。

2.2.2 発展課題実習Ⅱ

発展課題実習Ⅱでは、「北アメリカ州」において、発展課題実習Ⅰで明らかになった課題を踏まえ、授業展開とワークシートの再検討を行い、実践を行った。授業展開にはグラフや写真を読み取る活動を加え、資料読み取りの機会を増やした。ワークシートは情報読み取りと論理的に記述する活動を2つの過程に分けて考えられるように設計した。ワークシートの分析より、「論理的整合性」（ z (56) =2.10, $^{*}p$ = .036 ）、「情報読み取り」（ z (56) =3.41, $^{**}p$ = .001 ）の両方ともに有意な向上が見られた（ウィルコクソンの符号付け順位和検定）。また、M-GTAの結果より、対照的な情報の比較を行うことや、既習事項や実際に体験した内容を一度振り返り主発問に関連付けを行うという2つの要因が論理的に記述する力の向上に寄与することが明らかになった。

３．総合考察

2つの実践研究の結果より、本実践内において、論理的に記述する力の向上に寄与する要因として対照的な情報の比較、概念的知識の関連付けの2つが明らかになった。繰り返し活動を行うだけでは論理的に記述する力が向上しなかった生徒に対しては、「論理的に記述する際の要因である対照的な情報を資料や既習事項から述べる」、「既習事項や実際に体験した内容を一度振り返り、主発問に関連付ける」といった活動を授業内に取り入れて指導を行うことが、論理的に記述する力を育成に結びつくと考える。結論として、中学校社会科において複数の資料（非連続型テキスト）から情報を読み取り、論理立てて説明する活動は、論理的に記述する力の育成をめざすうえで効果的であり、複数の資料読み取りだけでなく、複数の資料から読み取れた情報の関連付けを行うことや、対照的な情報の比較を記述することができる枠組みが必要であることが分かった。また、資料を読み取る活動に対しては、提示した資料から何を読み取ればよいのか、どのような能力を育むのかを発達段階にあわせて考えていく必要があり、井寄・丸野（2006）が定めるスタンダードを設定し、資料精選を行う際の基準を定めることで、提示する資料によって難易度に大きく差が出てしまうということは避けられ、系統的、継続的に技能・能力を育成することができると考える。

今後は、論理的に記述する力の育成の視点を取り入れた学習指導の工夫や支援の実践をさらに蓄積し、学校教育現場におけるより効果的な学習指導の工夫を開発していくことが求められる。